



新刊
紹介



広くポーランド文化関連本や会員の著作をご紹介します

『優しい語り手～ノーベル文学賞記念講演』
オルガ・トカルチュク(著)、小椋彩; 久山宏一(訳)

岩波書店
2021.9

良い書籍との出会いは、いつも私を幸福にする。私事ながら、我が家の地下の書庫には一万数千冊の本が並んでいて、その背表紙を眼で追うだけで陶然となる。どの本も、あなたのために此処にいますよ、あなたのために書かれた本ですよ、と囁きかけてくれる。背表紙とすら、芳しいインチミットな関係が生じている書庫で私は激しく昂揚し、動悸しつづける。所謂、本の虫である。大抵の買物は靴下一枚買うのもためらうのに、本を買う時だけ惜しげがない。本当に潔い。

ポーランド文学、ポストモダンの旗手、トカルチュクに出遭ったのは白水社の『逃亡派』からだったが、確実に心掴まれたのは、岩波書店『迷子の魂』からだった。ヨアンナ・コンセホの絵も美しさを極めた。そのコンセホの装画とあらば、『優しい語り手』に触手が伸びない筈がない。一目散に購入した。

2019年のノーベル文学賞記念講演と2013年の来日記念講演『『中欧』の幻影(ファントム)は文学に映し出される～中欧小説は存在するか』が所収されている。『優しい語り手』は『迷子の魂』と同じ岩波書店から2021年秋に刊行されたもの。全160頁。身体を火照らせながら、これを私は一気に読み了えた。

優しい語り手

「文学は、自分以外の存在へのまさに優しさの上に建てられています」と語り、来日記念講演では「中欧は共通の宗教的、民族的、文化的、言語的アイデンティティを知りません」とし、「文学は形、匂い、成長を、育つ土地に負う植物に似るのです。私は中欧小説は菌糸体の特性を持つ、と言ってみたいのです」と断言する。何という直截な比喻。有機体を模した痛烈な隠喩。初章で彼女は「母」を「かつて魂と名づけられたものを私に与えてくれた。つまり母が授けてくれたのは世界で一番すばらしい優しい語り手だった」と切り出す。「世界は織物です。私達は毎日、大きな織機で小説(アネクドート)を織っている」「私達は多声的な一人称の語りの現実の中に生きて、至る所から多声的なざわめきが聞こえる」——こうして講演の内容を抽出していくと、紙幅がゆるされるならば私はきっとその全行を写し変えることになるだろう。

一行たりとて見落せない、トカルチュクの思惟の気迫、迫力、真率。全行が私のゆるみはじめた脳に鋭く滲み入った。世界を共感や優しさによって繋げ、神話的な物語の力を蘇らせる「第四人称」の語りに講演は加速的に収斂する。神話が私達の精神を作り、私達は神話を無視することができない——という彼女の揺るぎないその確信。優しさは関係するすべてに人格を与えます／優しさは、愛の最も慎ましい形です／優しさは自発的で無欲です。他者を深く受け入れることです／優しさは、私達の間にある結びつきや類似点、同一性に気付かせてくれます——トカルチュクの言葉が心地よく、音楽のように私の体内を巡る。

菌糸体のように生育する中欧文学

「言葉が足りない。視点が足りない。メタファーが足りない。新しい物語が足りない」と彼女に尚も尚も呼びかけられて、私は覚醒する。絶えざる流浪、破局、全体主義を強いられながら、西欧の周縁で、菌糸体のような独自の生育を遂げた中欧文学の魅力にこそ、私達は今、触れなければならないと気付く。

最後に邦訳の小椋彩(ひかる)さん(北海道大学卒業)に、最大限のオマージュを捧げたい。トカルチュクその人が憑依したような、言葉の省察の深遠。そして脚注の高い視点、広い視野に、殆ど驚嘆の思いでいる。表紙装画の、ヨアンナ・コンセホさんにも更なる賞賛の献辞を繰り返したい。その繊細な美しさに溜息やまない。このたびも亦、トカルチュクは、本に出逢う喜び、本という奇蹟、に私を誘ってくれた。あらたな書くことへの深みへ、自分が導かれてゆく予感がしている。境界線を意識的に踏み越えるところから、私は明日、私の意識のネジを巻き直しているだろう。講演だけに一層、生きることの意味の地盤に、直(じ)かに触れた確かな感触が今、私の掌中で熱く疼いている。

(長屋のり子)

